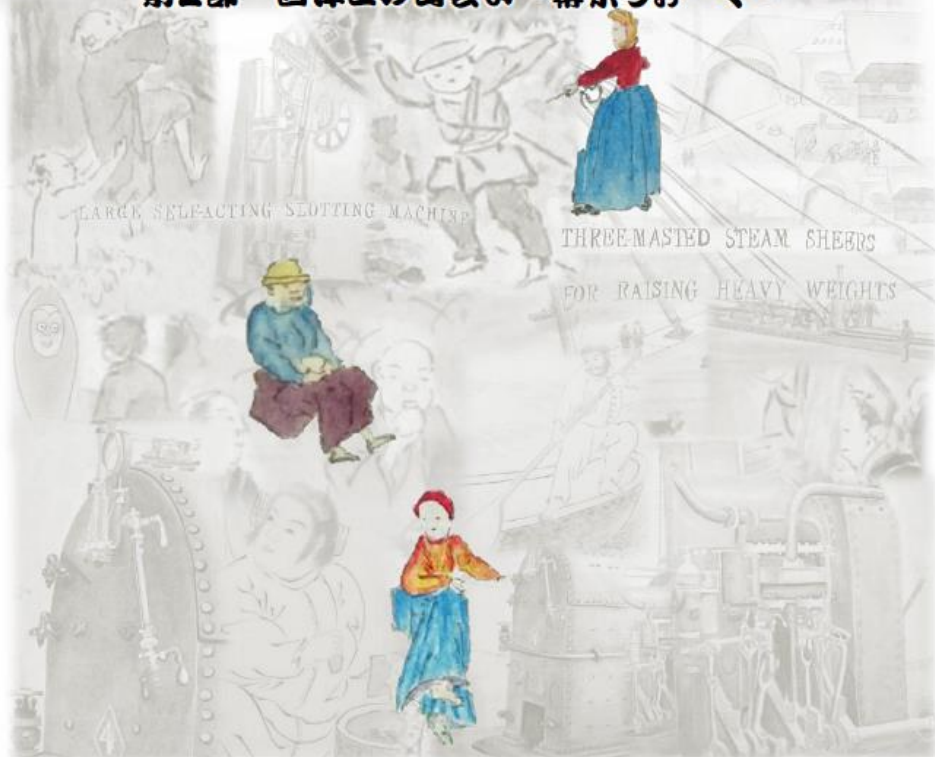


「通信全覧」「続通信全覧」重要文化財指定記念

外務省外交史料館 特別展示

幕末へのいざない

第2部 西洋との出会い～幕末うおーく～



平成 28 年 10 月 11 日（火）～12 月 27 日（火）

於：外務省外交史料館別館展示室

第2部 西洋との出会い～幕末うおーく～

目次

はじめに ～「通信全覧」とは～	-1-
第1章 外交関係の樹立	-2-
1-1 ペリー来航と開国	
1-2 吉田松陰と西洋世界	
1-3 日米修好通商条約	
1-4 日米修好通商条約批准書交換証書	
第2章 外国公館の設置	-8-
2-1 真福寺	
2-2 善福寺	
2-3 赤羽根接遇所	
2-4 東禅寺	
2-5 長応寺	
2-6 高輪接遇所	
～トピック 外国人の内地旅行～	-15-
1 駐日英国公使オールコックと富士登山・熱海温泉	
2 江戸在留外国人の遊歩	
第3章 パリ万博への参加と製鉄所の建設	-19-
3-1 パリ万国博覧会：徳川慶喜の国書案	
3-2 パリ万国博覧会：会場全図	
3-3 パリ万国博覧会：幕府と薩摩藩の対立	
3-4 パリ万国博覧会：出品された日本の品々①	
3-5 パリ万国博覧会：出品された日本の品々②	
3-6 パリ万国博覧会：参加メダルの授与	
3-7 製鉄所建設をめぐる日仏関係	
3-8 製鉄所建設をめぐる日英関係	
第4章 小笠原島への巡検	-30-
4-1 小笠原島への漂流	
4-2 咸臨丸の出発	
4-3 小笠原島に居住する人々	
4-4 小笠原島に生息する魚介類	
おわりに	-40-
展示史料の出典一覧	
主要参考文献	

はじめに～「通信全覧」とは～

「通信全覧」と「続通信全覧」は、幕末期における諸外国との往復書翰や会談記録、各種の草案などの文書を、独自の分類方法で再整理して清書しなおしたものです。その目的は執務の参考として利用することにあり、各国別の編年文書（日付順に綴ったもの）と個別事件・事項ごとに整理したものから構成されています。

「通信全覧」は、1859（安政6）年と1860（万延元）年の外交文書を徳川幕府が編集したもので、全部で320巻あります。

「続通信全覧」は、「通信全覧」の後をうけて、1861（文久元）年から1868（慶応4）年までの編年文書に、修好、貿易などの事項別部門を加えて外務省が編集・分類したものです。1871（明治4）年に一時着手し、明治7年から本格的な作業を始め、約10年をかけて完成させ、現在1784巻が残っています。

本特別展示は、外交史料館の所蔵する幕末期の外交文書集「通信全覧」「続通信全覧」が国の重要文化財に指定されたことを記念するものです。

その第2部を、平成28年10月11日から12月27日まで、「西洋との出会い～幕末うおーく～」と題して開催します。

諸外国との外交関係樹立によって、日本人、外国人ともにお互いの国を行き来し、様々な文化や自然環境に直接触れる体験をしました。本展示では、人々が単に他の国を「歩いた」だけではなく、それによって知識、技術、体験を得たことまでも含めて“うおーく”と表現し、紹介していきたいと思います。



第1章 外交関係の樹立

徳川幕府の時代、鎖国政策をとっていた日本は、オランダ以外の西洋諸国との外交関係がありませんでした。この鎖国政策を転換させたのがアメリカでした。1853年7月8日（嘉永6年6月3日）、日本を開国させるため、軍艦4隻とともにペリーが来日しました。

翌年、ペリーは軍艦7隻を率いて再び来航し、3月31日（嘉永7年3月3日）に日米和親条約が結ばれました。このようななかで、自らの眼で西洋世界をみたいと考えた吉田松陰は、来日中のペリー艦隊に密航を申し出ました。この密航計画は失敗しましたが、人々の海外への関心は次第に高まりつつありました。

その後幕府は、1858年7月29日（安政5年6月19日）に日米修好通商条約を締結し、これを皮切りにオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの間にも修好通商条約を結びました（安政の五か国条約）。

長く続いた鎖国は終わり、江戸に各国の外交官が駐在するとともに、本格的な外国との貿易が始まることになりました。幕府は条約を履行するための対応に追われ、条約の批准や開港開市の実施延期を交渉するため欧米へ使節団を派遣しました（第1部第2章参照）。この欧米への使節団は、幕府による最初の外国公式訪問という点、自らの足で現地をまわって様々な文物に触れたという点において日本にとって大きな意味をもつものでした。

本章では、ペリーの来航、吉田松陰の密航計画、日米修好通商条約、批准書交換に関する史料を紹介します。これらの史料は、開国によって人々の往来（“うぉーく”）が可能になった経緯やその条約上の根拠を示すものです。

1-1 ペリー来航と開国

1853年7月8日（嘉永6年6月3日）、浦賀沖にアメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが4隻の艦隊を率いて来航し、フィルモア大統領の国書を渡しました。年が明けて1854年2月11日（嘉永7年1月14日）、ペリーは7隻の艦隊を率いて江戸湾外に再び現れました。4回の交渉を経て、3月31日（3月3日）、日本側全権の林樺（あきら）らとペリー全権との間に日米和親条約が調印されました。日本はこの条約によって開国へと踏み出しました。

『ペリー提督日本遠征記』は、ペリー自身の日記、公文書や艦隊乗組員の日記・報告書などをもとに作成され、ペリー自らが監修しました。全3巻からなり、第1巻には航海や交渉の様子が記されています。第2巻には、各地の農業、魚類、植物の調査や小笠原・琉球の踏査報告が、第3巻には、各地の天体観測図などが収録されています。

※『ペリー提督日本遠征記』は川上昌明氏（故川上健三元外務省参与の長男）より寄贈されたものです。



展示史料 1-1

横浜におけるペリーと林大学頭との会談

1-2 吉田松陰と西洋世界

吉田松陰（寅次郎）は江戸に遊学中にペリーの浦賀来航を迎えました。佐久間象山のもとで砲術と蘭学を学んだ吉田は、西洋に関する見聞を広げたいと考えていました。1854年2月（安政元年正月）、ペリーが和親条約締結のため再び来航すると、4月25日（3月27日夜）、吉田は金子重之助を引き連れて、下田に来航していた米国艦隊のポーハタン号に乗り込み、外国への密航を懇請しました。しかし、通訳のウィリアムズは日米間で条約が結ばれたばかりであり、それを破るわけにはいかないとの理由で密航の願いを拒絶しました。吉田は海外渡航を禁止する「国禁」を犯したため、自首しました。5月6日（4月10日）、下田から江戸に護送され、11日（15日）に江戸町奉行所の牢獄に入りました（同年9月に萩の牢獄に幽閉）。

その後、1857（安政4）年に叔父が主宰していた松下村塾の名を引き継ぎ、杉家（毛利藩下士）の敷地に松下村塾を開塾しました。この松下村塾からは、久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋、前原一誠、品川弥二郎、山田顕義、野村靖など、維新・明治期に活躍する人材が育ちました。

展示史料は、密航について下田奉行組頭の黒川嘉兵衛と中台信太郎が吉田松陰らを尋問した時の文書です。吉田は密航の目的について「異国之情態」をよく知ることが「公事国家之急務」と考え、「五大洲研究」をする必要があると述べました。

松平大膳大夫家来
杉百合之助厄分
吉田寅次郎
寅二十五

甲寅四月朔日
世襲刊加秋へ蒙証松平大膳大夫家来同人也足難當贈人
兩人之書於一巻相記傳傳中上傳書也
黒川嘉兵衛
十巻信太郎
松平大膳大夫家来
杉百合之助厄分
吉田寅次郎
寅二十五
右寅次郎儀家祖已來軍學師範家小の兵
學師範教一居國許小の兵上
も教一候

……去丑年六月亜船浦賀へ渡来不穩に付異
國之情態審に弁へ公事國家之急務と存付異
船へ乗組五大洲研究之外はあるへからす乍
併御大禁之儀に付身を捨て策を行ふに如ず
と決心致し窃に異舶に乗組地球実験之上皇
國之御為に可致と覚悟を極め……

然る小拾々年之年限小の兵法執行之為め
先年中國元發足所々遊歴江戸小の兵
真田信濃守家来佐久間修理門下小相成軍
學砲術蘭學等相學ひ去丑年六月亜船浦賀
へ渡来不穩小付異國之情態審小辨へ公事
國家之急務と存付異船へ乗組五大洲研究
之外にある處から以て御大禁之儀に付
身を捨て策を行ふ小如きと決心致し窃に
異舶に乗組地球実験之上

展示史料 1-2

1854 年 4 月 27 日（安政元年 4 月 1 日）

密航を企てた吉田松陰（寅次郎）に関する尋問書

1-3 日米修好通商条約

日米和親条約によって限定的な開国をした幕府は、1858年7月29日（安政5年6月19日）、日本側全権の井上清直、岩瀬忠震とアメリカ総領事ハリスとの間で、日米修好通商条約を調印しました。アメリカ公使の江戸駐在、江戸・大坂の開市、神奈川（横浜）などの開港、自由貿易、片務的領事裁判の承認、日本の関税を条約で定めること（「関税自主権の喪失」）、外国人の遊歩などが規定されました。幕府はアメリカに続き、イギリス、フランス、ロシア、オランダとも同様の条約を結びました（安政の五か国条約）。



展示史料 1-3

1858年7月29日（安政5年6月19日）調印

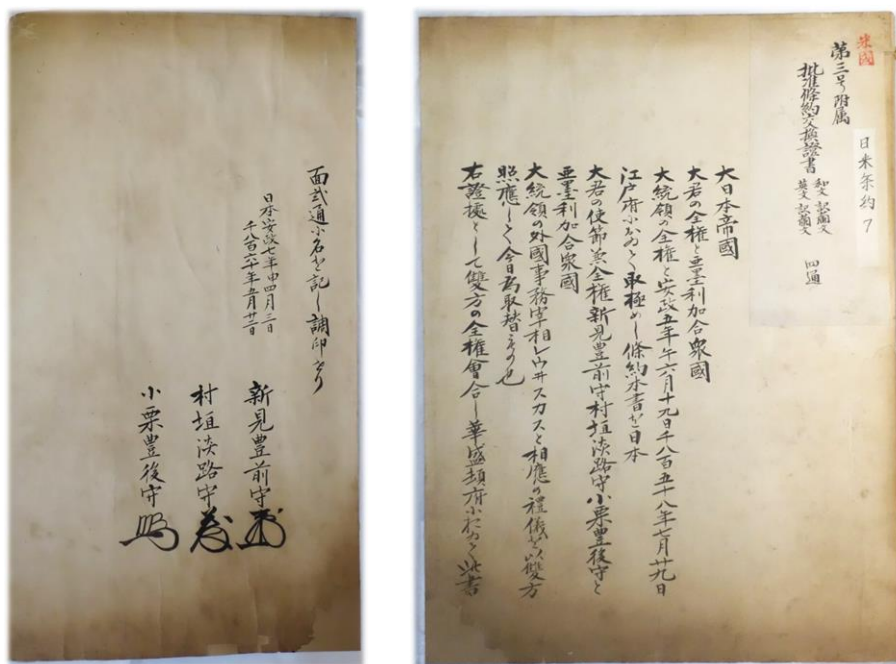
日米修好通商条約【複製】

1-4 日米修好通商条約批准書交換証書

日米修好通商条約の調印をうけて、江戸幕府は条約の批准書交換のため、外国奉行（神奈川奉行兼任）を正使とする使節をアメリカに派遣することを決定しました。1860年2月（安政7年1月）、米艦ポーハタン号と咸臨丸に分乗した一行はアメリカへと向かい、同年5月23日（万延元年4月3日）、ワシントンの國務省において、使節団正使の新見正興と國務長官のキャスとの間で批准書を交換しました。

展示史料は、批准書が正式に取り交わされたことを証明する批准書交換証書です。新見正興とキャスのほか、副使である村垣範正、小栗忠順の署名があります。

※批准：条約や協定に国家として最終的に同意することです。



展示史料 1-4 【重要文化財】

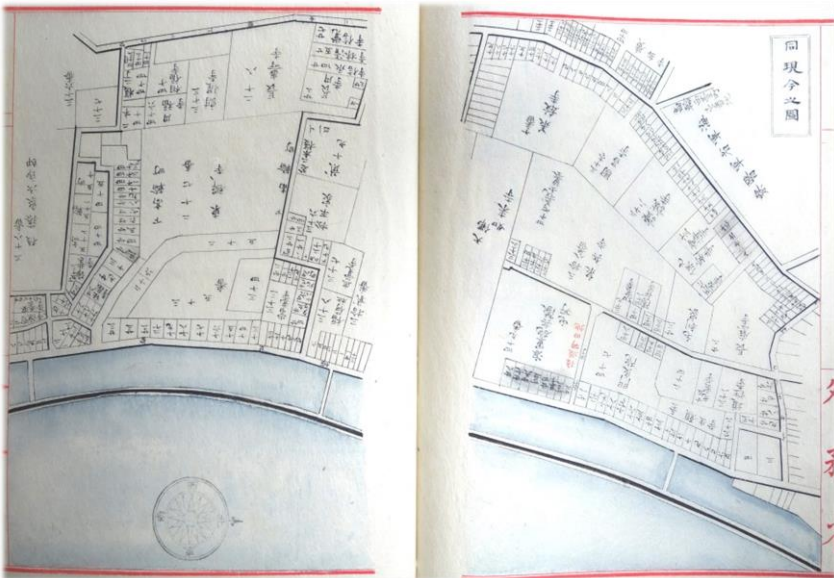
1858年7月29日（安政5年6月19日）調印

日米修好通商条約批准書交換証書

第2章 外国公館の設置

1858（安政5）年に結ばれた日米修好通商条約をはじめとする「安政の五か国条約」によって、江戸に外国の公使たちが駐在するようになりました。彼らは麻布や高輪などの寺院に公使館を設置し、外交活動を始めました。実際に外国人が日本と往来（“うおーく”）するようになると、外国人を排撃しようとする攘夷運動が激しさを増していきました。史料のなかには、幕府が公使館のある寺院の警備を強化しようとする試みも現れています。

本章では、現在も多くの大使館が置かれるこの地域が、幕末期にどのような歴史を歩んできたのか、なぜこの地域に外国公館が設置されることになったのかをみていきます。また、「続通信全覧」に記された地図と現在の地図を見比べながら、外国公館にまつわる出来事を紹介します。

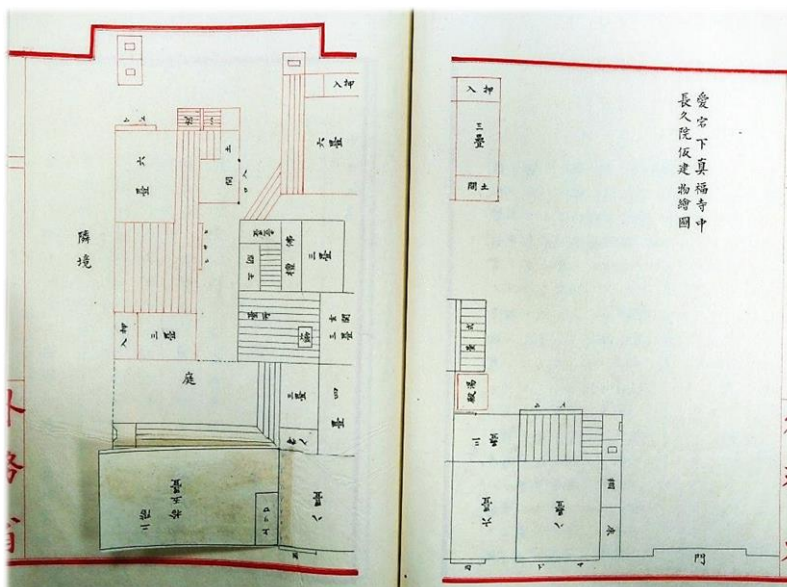


【参考】明治初年の高輪接遇所付近の絵図

2-1 真福寺

1858 年 4 月 23 日（安政 5 年 3 月 10 日）、オランダ使節ドンケル・クルチウスは幕府と修好通商条約を結ぶために江戸に入りました。クルチウスの宿所として指定されたのは愛宕山の下に位置する真福寺（真言宗）で、江戸城の城門まで約 500 メートル程です。真福寺から江戸城寄りには寺院はなく、さらに海からも近いという地理的な好条件を持っていました。クルチウスが去った後も、真福寺には修好通商条約締結のために江戸を来訪したロシア使節プチャーチン、フランス使節グローが滞在しました。

展示史料はオランダ使節クルチウスが 7 月 14 日（6 月 4 日）まで約 3 か月間滞在した真福寺の間取図です。



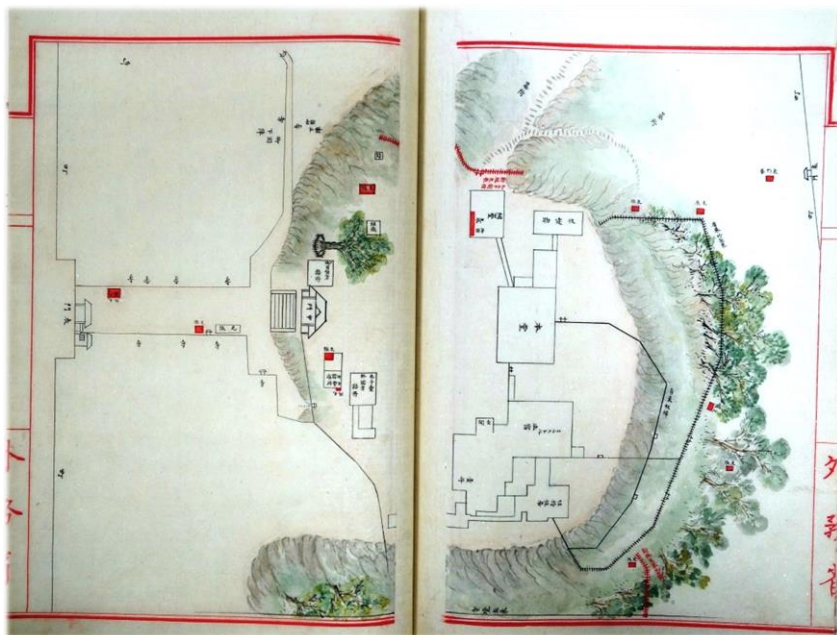
展示史料 2-1

1858 年 7 月 14 日（安政 5 年 6 月 4 日）
愛宕下真福寺中長久院仮建物の絵図

2-2 善福寺

駐日公使に昇格したハリス（第1部第3章参照）は、通訳ヒューズケンをともない1859年7月7日（安政6年6月8日）に麻布善福寺（浄土真宗）に入り、ここにアメリカ公使館を開きました。公使館は本堂の北側の建物（庫裏）に置かれ、日本側からは「異人館」などと呼ばれました。善福寺は浄土真宗の古刹として江戸の名所の一つでしたが、公使館設置以降、参詣者の減少や文久3（1863）年には火災に見舞われるなど困難もありました。

展示史料は麻布善福寺の絵図です。参道の両側には善福寺の子院が並んでいます。本堂の右側に「ミニストル止宿」とあり、ここがアメリカ公使館として使用されました。中門の手前や善福寺を取り囲むように、警備のための見張小屋や矢来（臨時の柵）が建てられました。



展示史料 2-2

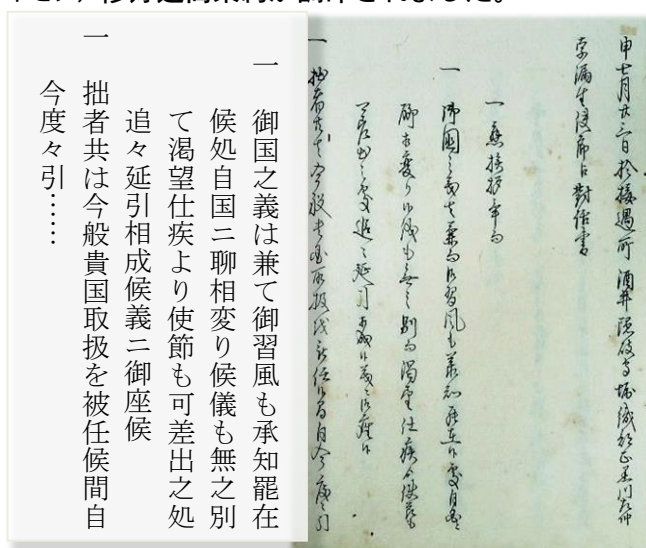
1860年1月（安政6年12月）
善福寺境内の絵図

2-3 赤羽根接遇所

1859年4月16日（安政6年3月14日）、芝増上寺の裏手にある芝赤羽根講武所付属調練所跡に、外国人のための赤羽根接遇所が建設されました。同所には、幕府役人の詰め所、厩、警備の番所も設置されました。1860年9月8日（万延元年7月23日）、プロイセン使節オイレンブルグ一行が同所に入り最初の談判を開始しました。その後、ロシア領事ゴスケビッチや再来日したフィリップ・シーボルト（幕府顧問）もここを宿所としました。

幕府は諸外国が国旗を公館に掲げることを知り、同所にも旗竿（旗台）を設置しました。『オイレンブルグ日本遠征記』には「家全体の設備は、いささかテントのようであるが、快晴で暖かい天気ของときは、とにかく快適な住み心地」との感想が記されています。

展示史料は、1860年9月8日（万延元年7月23日）、プロイセン使節オイレンブルグ一行が赤羽根接遇所に入り最初の談判を開始した場面です。1861年1月25日（万延元年12月14日）、赤羽根遇所で日普（プロイセン）修好通商条約が調印されました。



展示史料 2-3

1860年9月8日（万延元年7月23日）

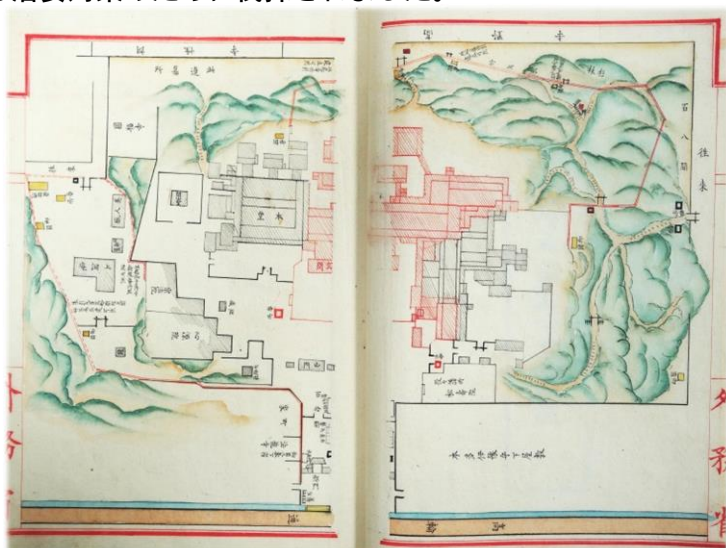
赤羽根接遇所における最初の談判

2-4 東禅寺

イギリスの駐日総領事オールコックは、1859年7月3日（安政6年6月4日）に東禅寺（臨済宗）に入り、総領事館を開きました（公使昇格とともに、公使館となりました）。

オールコックは自著『大君の都』で、十分な宿泊施設、広い土地、海上との連絡が容易という立地条件の良さを語っています。しかし、1861年7月5日（文久元年5月28日）、東禅寺を水戸浪士14人が襲撃し、書記官のオリファントと長崎駐在領事のモリソンが負傷しました。さらに翌年6月26日（5月29日）にも公使館の警備をしていた松本藩士がイギリス兵2名を殺害する事件が起こったため、公使らは比較的安全な横浜に移りました。この後、江戸のイギリス公使館は、泉岳寺前に建設された高輪接遇所に引き継がれました。

展示史料からは、幕府が東禅寺事件を受けて警備の強化を図ろうとしたことがうかがえます。東禅寺の周囲には樹木が数多く生えていましたが、同事件以降、侵入者に対して警備の目が届かないため、樹木は治安対策のために伐採されました。



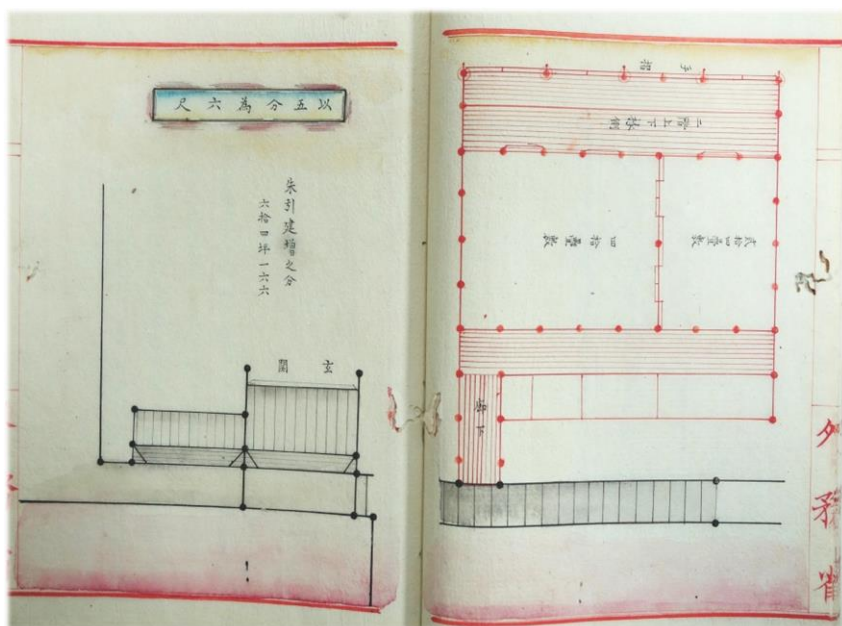
展示史料 2-4

1861年7月5日（文久元年5月28日）
東禅寺英国仮公使館の絵図

2-5 長応寺

オランダは当初、外交使節を江戸に置かず長崎出島を本拠とし、総領事が江戸に出た際に長応寺（日蓮宗）を利用していました。1863（文久3）年に総領事職を引き継いだポルスブルックは横浜に本拠を移しましたが、長応寺を江戸での公館として引き続き利用しました。ポルスブルックはスイス、ベルギー、デンマークなどのヨーロッパ諸国と幕府の条約締結に積極的に関わったことから、長応寺はヨーロッパ諸国と幕府の外交交渉の舞台となりました。

展示史料は止宿所として手狭になった長応寺の建て増し計画の図面です。オランダの公館は居館の新築などを含む増築工事を施し、1866年に完成しました。



展示史料 2-5

1861年5月17日（文久元年4月8日）

オランダ国使臣長応寺建て増し計画の絵図

2-6 高輪接遇所

イギリス公使は度重なる襲撃事件によりその住居を横浜に移していましたが、1865（慶応元）年、代理公使ウィンチェスターは泉岳寺（曹洞宗）を公使館とすることを幕府に求めました。さらに、同年7月8日（5月16日）に着任した公使パークスは、泉岳寺中門前の敷地に公使館を設置することを幕府に要求しました。幕府はイギリスの強い要望を受け、1866年11月26日（慶応2年10月20日）に同国公使館を建設し、攘夷派の焼き討ちの危険を避けるため、「高輪接遇所」と称することになりました。

展示史料からは高輪に外国公館が数多くあったことがわかります。主な公館は、イギリス公使館の東禅寺・高輪接遇所、フランス公使館の済海寺（浄土宗）、オランダ公館の長応寺、プロイセンの宿寺の広岳院（曹洞宗）、スイスの宿寺の正泉寺（浄土宗）です。海上の艦船との連絡が容易で、江戸と開港場の横浜との間にあることが、公館を置く上で都合がよかったと考えられています。



展示史料 2-6
1865 年（慶応年間）
高輪接遇所付近の絵図

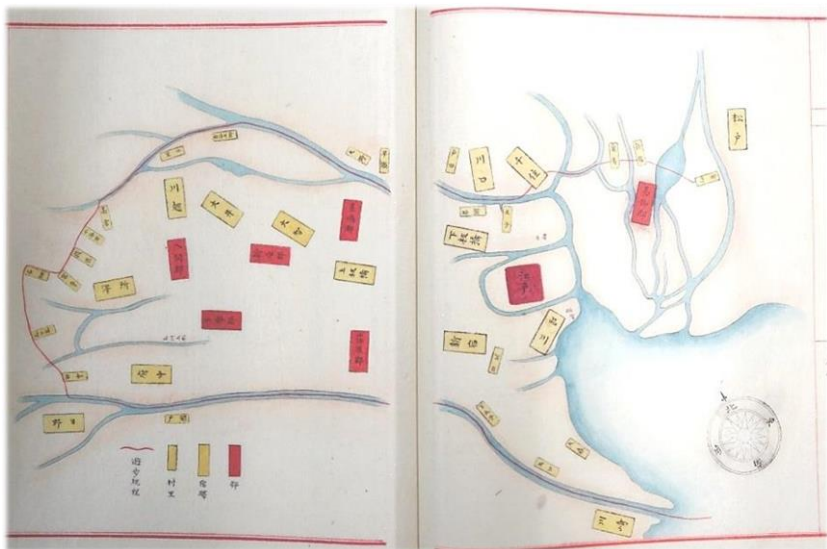
トピック 外国人の内地旅行

安政の五か国条約（1858年）によって、外交官・領事は首都における居住の権利と、国内をどこでも自由に旅行する権利が保証されていました。英国公使オールコックは、この条約の規定（「日英修好通商条約」第2条）を行使し、外国人として初めて富士山に登頂しました。

一方、一般の外国人は、居留地（横浜・長崎・函館など）及び遊歩規程で定められた土地以外は移動・居住できませんでした。

幕府は諸外国との遊歩規程の策定に向けて交渉を行いました。

このトピックでは、外国人の日本での“うおーく”について紹介します。



【参考】1867（慶応3）年に作成された江戸在留外国人遊歩規程の絵図

【1】1860 年 10 月 6 日（万延元年 8 月 22 日）の溝口直清と英国領事ユースデン
の会談 ～富士登山と熱海温泉～

- 一 其許ニは温泉浴され候後少しは強壯相成られ候様ニも被覚候哉
- 一 頗る強壯相成候様存候尤只湯あみ致し候而已ならず度々呑候
事も有之候
- 一 我邦ニては温泉を呑候事毒と心得一向相用不申候
- 一 尤硫黄は下剤ニ相成候物故右を呑候ニは前夜より食物其外氣
を付不申候ては不相成事ニ候
- 一 富嶽登山は如何ニ候哉天氣其外之都合宜敷有之候哉
- 一 登山前日は大風雨ニ候得共登山之当日は誠ニ好天氣ニ……

一 吾輩は温泉に浴し候後少しは強壯相成られ候様ニも被覚候哉

一 尤硫黄は下剤ニ相成候物故右を呑候ニは前夜より食物
を付不申候ては不相成事ニ候

一 我邦ニては温泉を呑候事毒と心得一向相用不申候

一 富嶽登山は如何ニ候哉天氣其外之都合宜敷有之候哉

一 登山前日は大風雨ニ候得共登山之当日は誠ニ好天氣ニ……

溝口の発言

ユースデンの発言の発言（一段下がり）

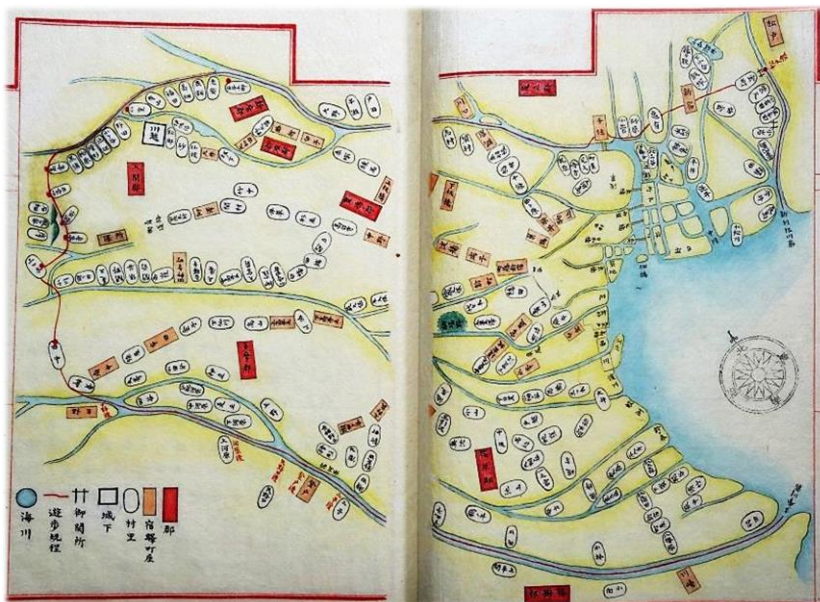
オールコックは富士登山について、江戸における一種の監禁状態から脱出する楽しさと、目新しい事物を視察するという魅力があると述べました。実は、この旅行にはもっと重要な意味があるとも言っています。それは、閣老たちが「外国貿易の急激な需要のために生じたあらゆる物価の高騰によって、国内は不安定な状態」にあるということに根拠があるのかを自分の目で確かめることでした。また、外国人に対する敵意が政治の中心から離れたところに存在しているのか、などの疑問を持つオールコックは、「国内をぶらぶら旅行しているあいだに、個人的に観察してこそなしとげることができるのだ」と述べました。

外国人の富士山初登頂が実現したのは、1860年9月11日（万延元年7月26日）でした。オールコックの回想には、登山の苦労や困難の様子が描かれています。頂上に到着すると、オールコックらは噴火口の測量や気温を測定しました。帰路には、一行は来た道を三島から伊豆半島にそれ、2週間かけてのんびりと熱海に逗留しました。

オールコックは熱海に滞在して、「休養と海の空気と熱海の鉱泉の衛生的効果をためしてみようと決心」しました。展示史料は、オールコックに同行したユースデンと幕府の溝口直清との会談記録です。ユースデンは、熱海温泉に入ったお陰で強壮になったこと、温泉を呑んだこと、富士登山時の天候などについて述べています。

【2】 1867 年 6 月 19 日～11 月 18 日（慶応 3 年 5 月 17 日～10 月 23 日）

江戸在留外国人遊歩規程下調図



1858 年 7 月 29 日（安政 5 年 6 月 19 日）調印の日米修好通商条約の第 3 条で、神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港と江戸・大坂の開市が規定されています。

同条約の第 7 条では、第 3 条で決めた開港場所付近のアメリカ人の行動範囲を規定しています。

しかし、幕府は京都に近い兵庫や大坂、政治の中心地江戸をすぐに関することで人心に様々な影響（物価騰貴や攘夷論の高まり）を与えることを懸念しました。そこで、幕府は欧米に使節団を派遣し、開港・開市延長の交渉を始めました（第 1 部第 2 章参照）。その後も、江戸開市は延期されましたが、1867 年 11 月 24 日（慶応 3 年 10 月 21 日）に「外国人江戸に居留する取極」が結ばれました（1869 年 1 月 1 日に開市）。

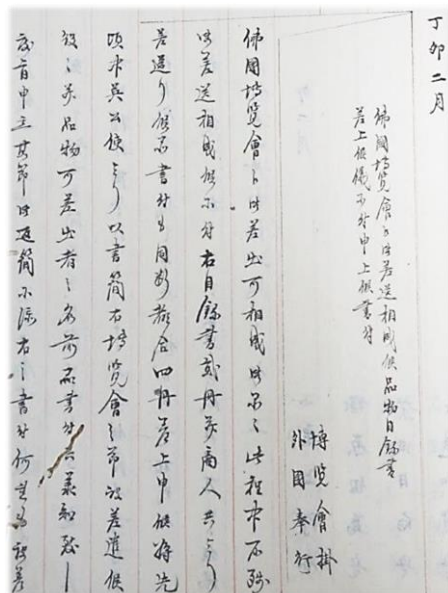
展示史料は、江戸に居留する外国人が自由に行動できる範囲（＝遊歩）を幕府が検討し作成した地図です。外国人と日本人の摩擦を防ぐため、外国人は築地に居留し、朱線の範囲内であれば自由に行動できるとされました。

第3章 パリ万博への参加と製鉄所の建設

ここまでみてきたように、日本が西洋諸国と条約を締結し、開国へと歩みを進めた結果、外国人が日本国内で活動するようになりました。そしてその一方で、日本人も積極的に海外へ赴き、現地と往来（“うおーく”）するようになりました。

幕府は1867（慶応3）年にパリで開催された万国博覧会に参加して日本の産品を紹介し、日本を世界にアピールしました。また、幕府や各藩は有能な人物を次々に海外へ派遣し、西洋の知識や技術を得ようと努め、それは日本の様々な分野における発展の礎となりました。日本の戦後経済復興の原動力ともなった造船業も、幕府の製鉄所建造計画に基づく技術習得がその始まりでした。

本章では、徳川昭武らのパリ万博参加（1867年）を取りあげ、国際社会へデビューした日本の様子を関係史料で紹介します。また、幕府の横須賀製鉄所設立準備に向けた柴田剛中らの仏英両国派遣（1865年）の経緯を振り返ります。



【参考】
パリ万博出品目録の送付

3-1 パリ万国博覧会：徳川慶喜の国書案

日本が初めて国際的な博覧会に参加したのは、1867（慶応 3）年のパリ万国博覧会です。徳川慶喜は自身の弟昭武（当時 14 歳）を名代としてパリ万博に派遣しました。慶喜には、フランス派遣の機会に昭武に学問をはじめ様々なことを習熟させたいとの思いがありました。展示史料は、昭武一行がフランス皇帝に差し出した徳川慶喜の国書 の原案です。昭武の紹介とともに、幕臣数人の留学についても、フランス皇帝の配慮を要望しています。

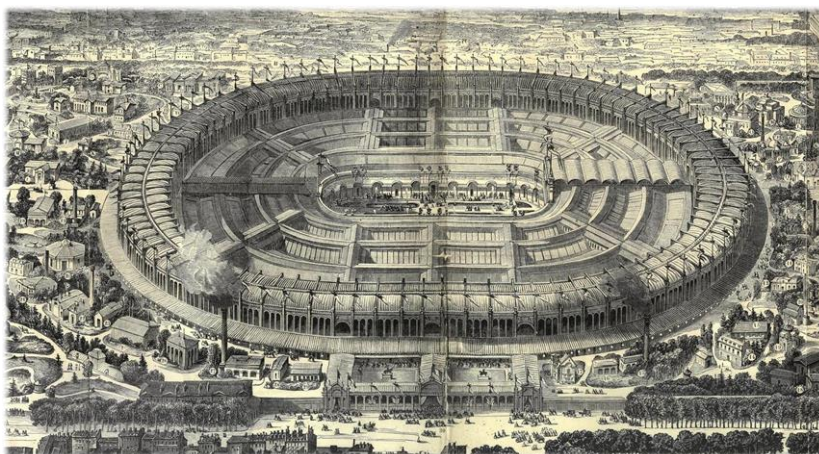
大徳ある
陛下に貴國へ對し友睦懇親之情厚きを表せんと為め
我々徳川民部大輔を掄選し其都府へ差遣せり乍去
右民部大輔義ハ少年ニありて諸事ニ慣熟せざれば
幸ニ
陛下に省恐あるを望む且其人諸学科修業を為め
我臣等も諸子弟等數人を送る貴國都府へ留学せしめ
積る貴國に對し其情厚きを望む
陛下に配慮あるを望む將き國民におよび
……殿下并貴國へ對し友睦懇親之情厚きを表せん為
め我弟徳川民部大輔を掄選し其都府へ差遣せり乍去
右民部大輔義ハ少年ニていまた諸事に慣熟せされば
幸に殿下之宥恕あらんを望む且ッ同人諸学科修業之
為め我臣下之諸子弟等數人を追々貴國都府へ留学さ
すへき積ニ付右生徒之事ニ付ては殿下之配慮あられ
んを望む將貴國民および殿下之幸福を祈る……

展示史料 3-1

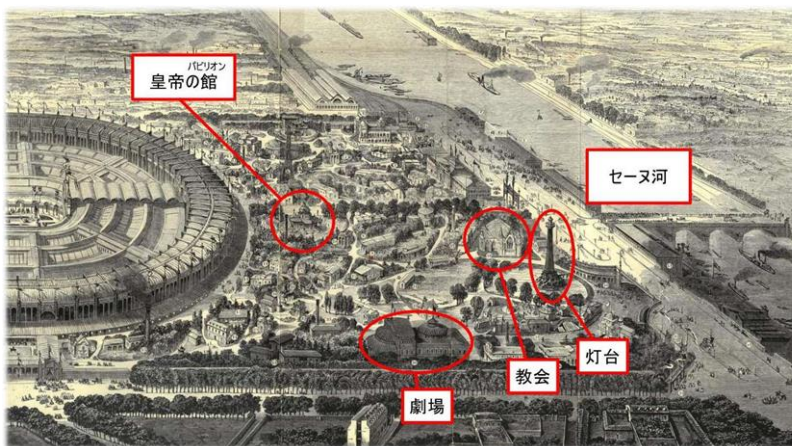
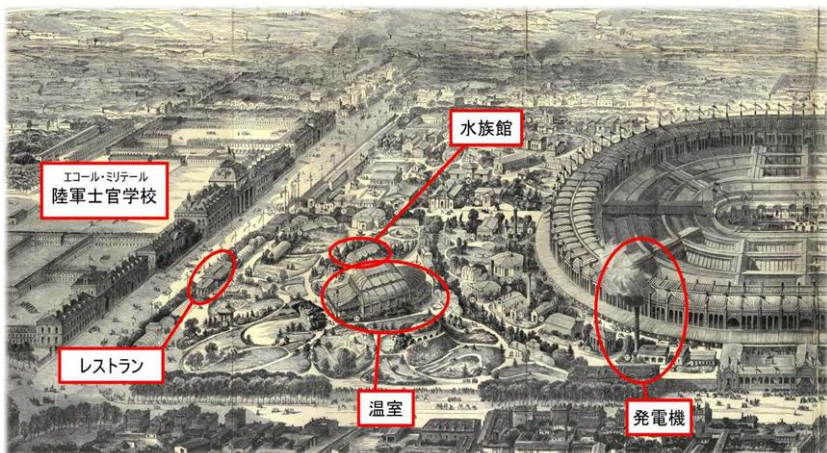
1867 年 1 月 27 日（慶応 2 年 12 月 22 日）
フランス皇帝宛ての徳川慶喜の国書案

3-2 パリ万国博覧会：会場全図

会場の形は巨大な楕円形をしていました。敷地は約 16 万 5800 m² で遊歩道が整備され、メイン会場の外周には 100 軒を超える各国の展示会場、売店、遊園地、レストランなどが立ち並んでいました。各国の展示スペースはフランスが大部分を占め、イギリスが 6 分の 1、プロイセン・ベルギー・オーストリアが 16 分の 1、ロシア・アメリカ・イタリア・オランダ・スイスが 32 分の 1、日本・シャム（タイ）・清国は狭い場所だったようです。



展示史料 3-2
パリ万国博覧会会場の絵図



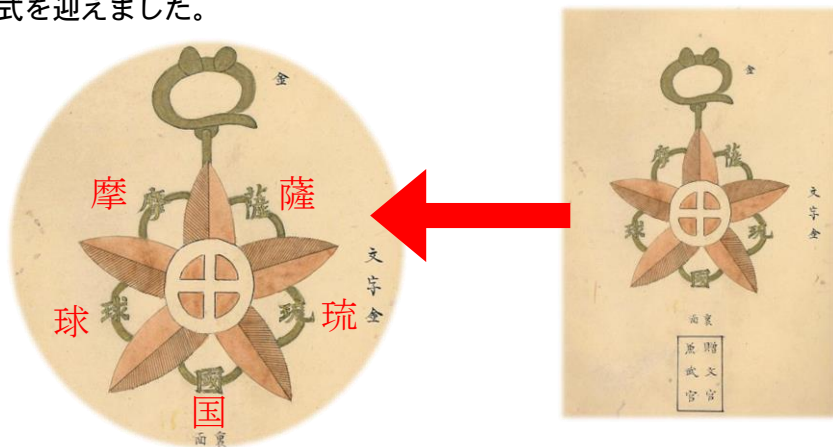
【参考】
 中央がメイン会場
 皇帝の館や陸軍士官学校などの施設がみえます。

3-3 パリ万国博覧会：幕府と薩摩藩の対立

幕府は諸藩に対し、パリ万国博覧会への参加を呼びかけ、佐賀藩と薩摩藩が参加を表明しました。1866年3月26日（慶応2年2月10日）、薩摩藩一行はイギリス汽船で鹿児島を出発し、香港、サイゴン、シンガポール、アデン、スエズ、アレクサンドリアを経て、翌年2月6日（3年1月2日）にマルセイユに到着しました。

薩摩藩の一行は、フランス到着後、薩摩の代表と名乗らず、「薩州侯兼琉球王の使節」と称しました。薩摩藩は博覧会会場において、一区画を借り受けると、そこに琉球王国の名を標示し、さらに「丸に十字」（島津家の家紋）の旗章を掲げ、開会日にも琉球王国の使節として式典に参列しました。

展示史料は、薩摩藩が作成した勲章の絵図です。幕府の万博参加のねらいの一つには、「幕府の主権」を確立し、それを諸外国に知らせることがありました。そのため、薩摩による「琉球王国」「薩摩政府」という偽称は許容できない問題でした。西洋諸国の間に、日本には主権国家が複数あるとの誤解を与え、幕府の立場に疑問を持つ者も現れたため、幕府の使節団と薩摩藩との間に摩擦が起こり、関係者はその調整に苦労しました。ナポレオン3世の臨席のもと開場式を迎えました。



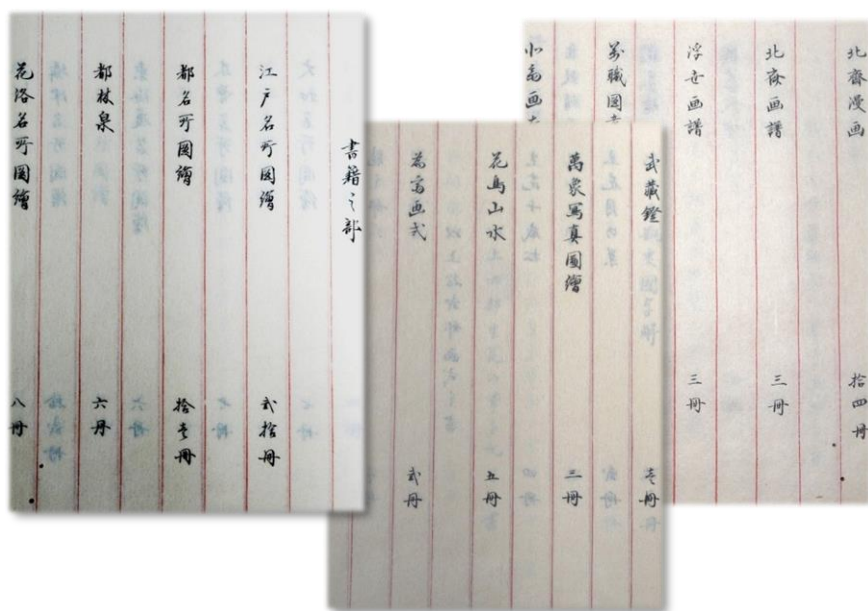
展示史料 3-3
薩摩藩が作成した勲章の絵図

3-4 パリ万国博覧会：出品された日本の品々①

幕府は漆器、陶器、武具、衣服、金工品、鋳物、日本画、和紙、材木、昆虫類などを出品しました。

薩摩藩の出品物は、自藩の産物と琉球産のものに分けられます。薩摩藩は漆器類（重箱、料紙箱、菓子盆、盃など）、材木（杉、松、梅、桜、楠など）、農具（鋤、鍬、鎌など）、茶器、竹細工、反物、樟脳などを用意しました。琉球からは特産品の白・黒砂糖、反物（細上布、紺地木綿）、篠細工、泡盛などを出しました。

パリ万国博覧会に出品された日本の産品は、ヨーロッパの人たちの目を惹きました。なかでも七宝焼、浮世絵、漆器類、美術工芸品、和紙などはとくに人気がありました。

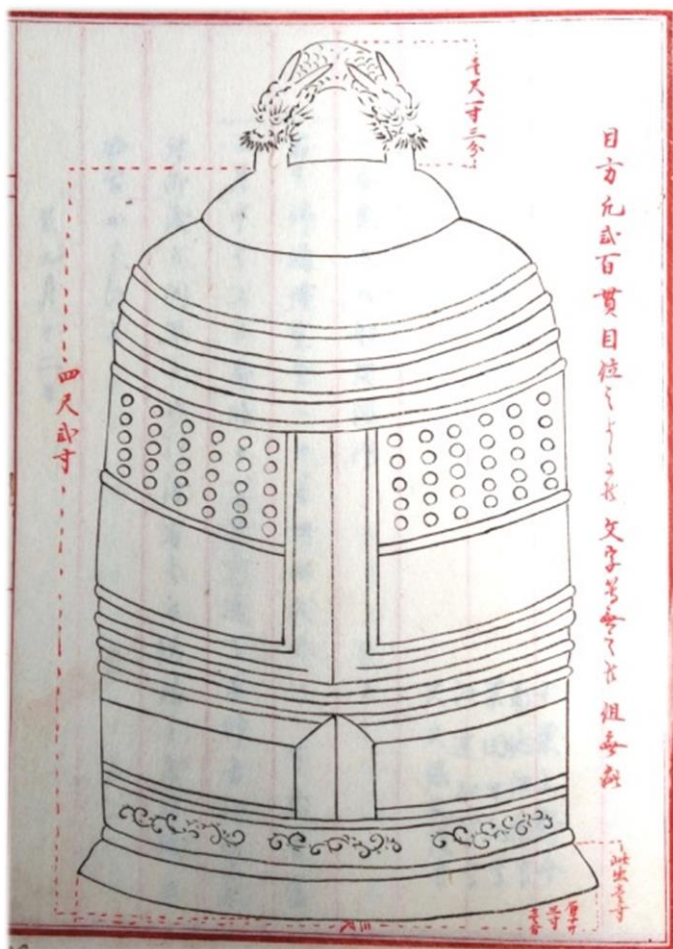


展示史料 3-4

出品目録の一部

「江戸名所図繪」や葛飾北斎の作品が出品されました。

3-5 パリ万国博覧会：出品された日本の品々②



本体：高さ約 1.3m、重さ約 375kg 龍頭：約 33cm

[展示史料 3-5](#)

幕府所有の大船安宅丸の釣鐘の絵図

3-6 パリ万国博覧会：参加メダルの授与

日本の参加を記念して作成されたメダルの拓です。片面（下）の中央部に「JAPON」（日本）と書かれています。



展示史料 3-6
参加メダル（拓本）

3-7 製鉄所建設をめぐる日仏関係

3-1～3-6 までは、パリ万博を通じて日本人が海外で知識や技術を獲得しようとすることや日本文化の海外発信をみてきました。3-7～3-8 では、製鉄所建設を例にとり、海外からの技術導入についてみていきたいと思います。

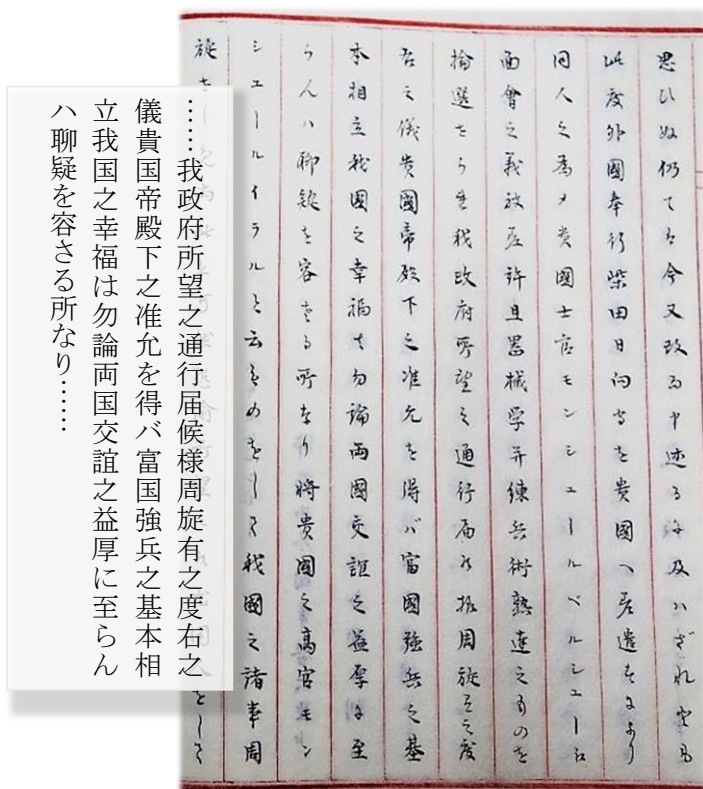
幕府は江戸の近海に大規模な製鉄所を建造する計画を立てていました。勘定奉行の小栗忠順（ただまさ）と栗本鋤雲（じょうん）は、海軍建設のため修船場の必要を痛感し、フランス公使のロッシュに相談したところ、協力してもらえることになりました。1865 年 2 月 24 日（慶応元年 1 月 29 日）、老中の水野忠精（ただきよ）、酒井忠毗（ただます）は、製鉄所の約定書をロッシュに提出しました。

6 月 27 日（閏 5 月 5 日）、幕府は外国奉行柴田剛中（たけなか）に全権委任状を与え、フランスへ派遣しました。柴田一行は、江戸を発して横浜に入り、イギリス船ネパール号に乗り込み、8 月 17 日（6 月 26 日）スエズに着き、汽車でアレクサンドリアへ向かい、8 月 26 日（7 月 6 日）マルセイユに到着しました。

9 月 19 日（7 月 30 日）、柴田はフランス外相に面会し、老中の書翰を提出しました。展示史料には、幕府が西洋各国の制度にならって製鉄所や造船局などを建築し、「富国強兵之基本」を立てることで、「異常之外患内憂」から身を守り、日本の幸福や日仏両国の親交を深めることにつながると書かれています。

目的を果たした一行は、12 月 8 日（10 月 21 日）にパリを出発しました。その後、柴田一行はイギリスに立ち寄り、1866 年 3 月 12 日（慶応 2 年 1 月 26 日）に横浜に戻りました。

なお、横須賀製鉄所は未完成のまま明治新政府に引き継がれ、1871（明治 4）年にドック、製鉄・錬鉄・鑄造・製罐の各工場が完成しました（1871 年 5 月 27 日）に「横須賀造船所」と改称）。同所は雇傭したフランス人の技術力と輸入機械の高い水準により、造船にとどまらず他の産業分野にも活用され、政府の殖産興業政策を支えました。



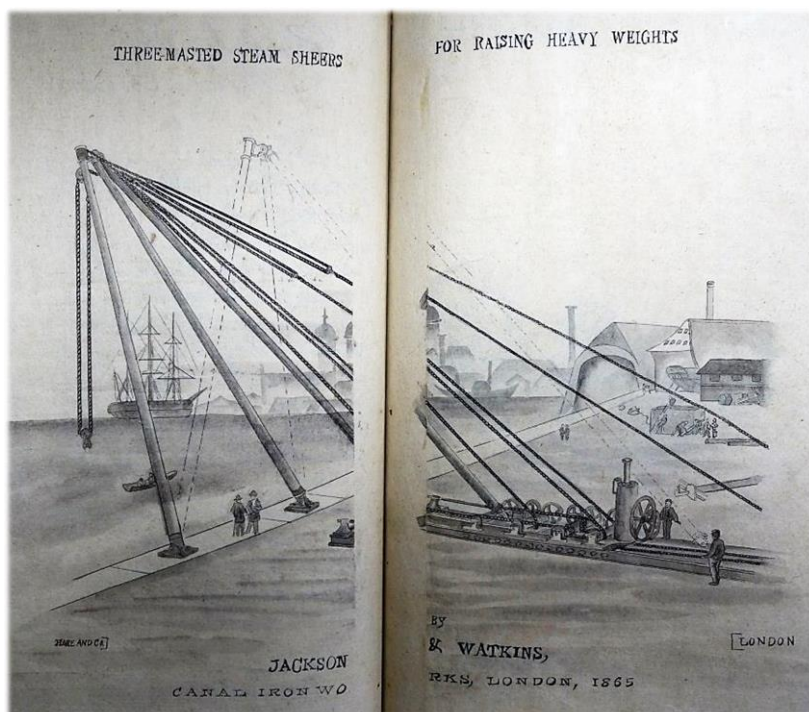
展示史料 3-7

1865年6月24日（慶応元年閏5月2日）
フランス外務大臣へ宛てた老中の書翰

3-8 製鉄所建設をめぐる日英関係

展示史料は、イギリス商人の書翰に添えられた器械の図面です。フランス公使のロッシュは、「自分の国だけで一手に引き上げることは隣国のイギリスの猜妬を招くおそれがあったので、機器の幾分かはイギリスから購買させる方が得策」と考えました。これを幕府に説いて、ロッシュは柴田剛中をイギリスに渡航させ、同政府からの機器購入を依頼させました。

※猜妬：やっかみのこと



展示史料 3-8

1866年2月17日（慶応2年1月3日）

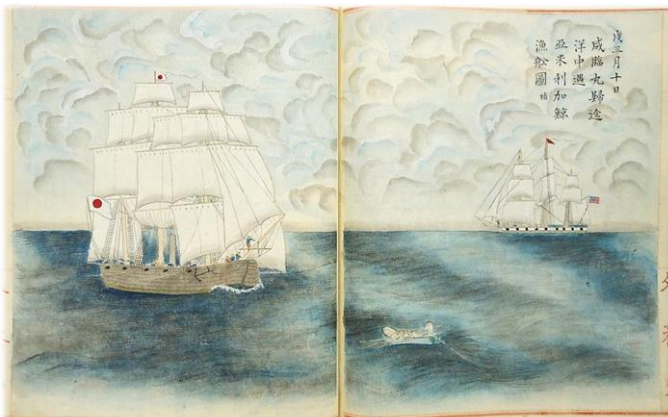
ロンドンにおける揚卸器械の図

第4章 小笠原島への巡検

小笠原島は1593（文禄2）年に小笠原貞頼が発見したとされています。幕府は1675（延宝3）年に渡航巡視しましたが、その後は放置した状態が続いていました。1820年代にはイギリス、アメリカの捕鯨船が来航、1830（天保元）年からは欧米人がハワイ先住民たちと移住し生活していました。

幕府は、イギリスやアメリカが小笠原島に関心を示していることを駐日公使の談話や遣米使節の報告で知りました。この状況に危機感をもった幕府は、1862年1月2日（文久元年12月3日）、外国奉行水野忠徳一行を小笠原島に派遣しました。一行は外国人移住民を集めて誓書を徴し、地券を交付し、扇浦に「小笠原島新墾の碑」を建て、出張所を設置するなど、小笠原島が日本の属島であることを明確にする措置をとりました。巡検を終えた一行は咸臨丸で二見港を発し、1862年4月13日（文久2年3月15日）、下田に入港、陸路で江戸に帰着し、幕府に報告書を提出しました。

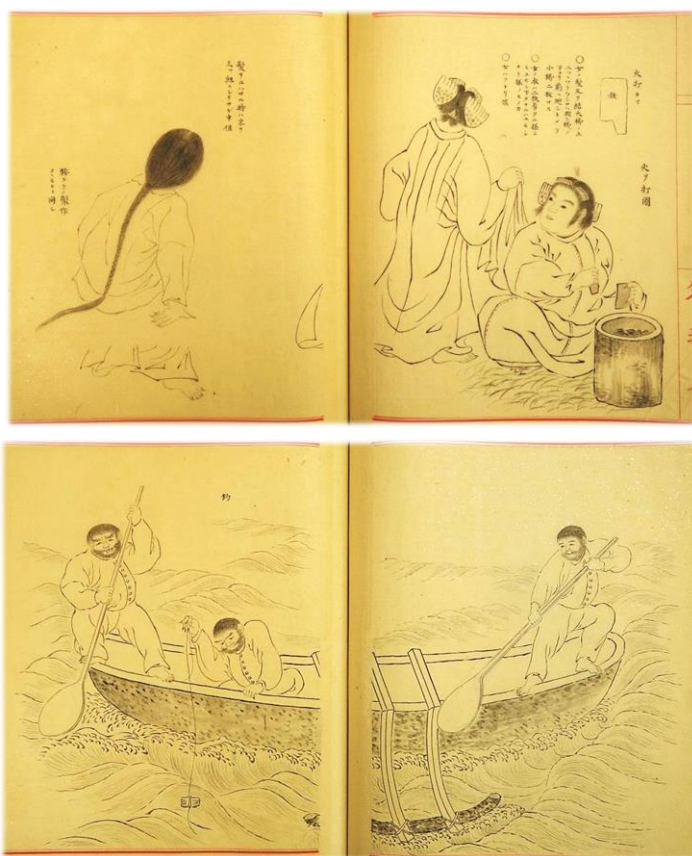
本章では、小笠原島開拓に関する史料のなかから、島民の生活や自然環境の様子がうかがえる絵図を紹介します。幕府の役人が小笠原島を“うおーく”した足跡が史料のなかに多数残されています。



【参考】
「咸臨丸帰途洋中
遇亜米利加鯨漁船」
の絵図

4-1 小笠原島への漂流

展示史料は、1840 年 5 月（天保 11 年 4 月）、小笠原島の父島に漂着した陸奥国（現在の岩手県）の船頭三之丞が島人の生活の様子を話した記録です。船頭ら 7 名の乗組員はおよそ 1 か月父島に滞在し、欧米系住民の世話を受けました。船頭は島民が約 30 名いること、島民の親切な対応、現地で使用される言語（英語とハワイ語）などについて幕府に報告しました。しかし、この時幕府が何らかの行動をとることはありませんでした。



展示史料 4-1
1840 年 5 月（天保 11 年 4 月）
小笠原島民の生活

4-2 咸臨丸の出発

19世紀に入り、太平洋における捕鯨業の発展にともなって、欧米艦船の小笠原島への来航が頻繁となりました。

こうしたなか、イギリス公使のオールコックから小笠原島領有について質疑が寄せられ、老中の安藤信正は同島を巡視する必要があると感じました。1860（万延元）年、咸臨丸の太平洋横断に際して同島への寄港と実情視察を計画しましたが、実現しませんでした。遣米使節（日米修好通商条約の批准書交換のため）は、アメリカ滞在中に英米両国の同島に対する関心を知り、帰国後に幕閣に報告しました。その一方で、1861年12月17日（文久元年11月16日）、幕府は英米両国に対して、小笠原島開拓再興を通告しました。英米両国は、日本人の移民に関しては異議を唱えず、自国移住民の権利保持や外国船舶の自由停泊の保証を求めるにとどまりました。

こうしたなか、1862年1月2日（文久元年12月3日）、幕府は外国奉行水野忠徳、目付服部帰一、支配調役並田辺太一らを小笠原島に派遣しました。



展示史料 4-2

1862年1月18日（文久元年12月19日）

咸臨丸風波の絵図

展示史料は、小笠原島に向かう咸臨丸の様子を描いたものです。絵図に描かれたように船旅は連日の時化など困難をともないました。1862年1月、一行は父島に渡り、外国人移住民を集めて誓書を徴し、地券を交付し、扇浦に「小笠原島新墾の碑」を建て、出張所を設置するなど日本の属島であることを明確にする措置をとりました。一行は父島の巡検後、母島に上陸しました。このとき中浜万次郎（ジョン万次郎）が外国人島民との通訳に当たりました。

調査を終えた一行は咸臨丸で二見港を発し、1862年4月13日（文久2年3月15日）、下田に入港し、陸路江戸に帰着し、幕閣に報告書を提出しました。田辺太一は「小笠原はきわめて小さい島であるとはいえ、目下伝えられているようにパナマ運河が完成して西洋との交通が便利になれば、各国の船舶にとっては南サンドウィチ島と相対して、太平洋の最も重要な地点」になるとし、決して開拓を怠らないよう幕府に上申したと回想しています。

この報告を受けた幕府は小笠原島の開拓と日本人の入植を決定し、1862年8月26日（文久2年8月2日）に入植者が父島に到着し、未開拓であった扇浦を中心に居住を始めました。

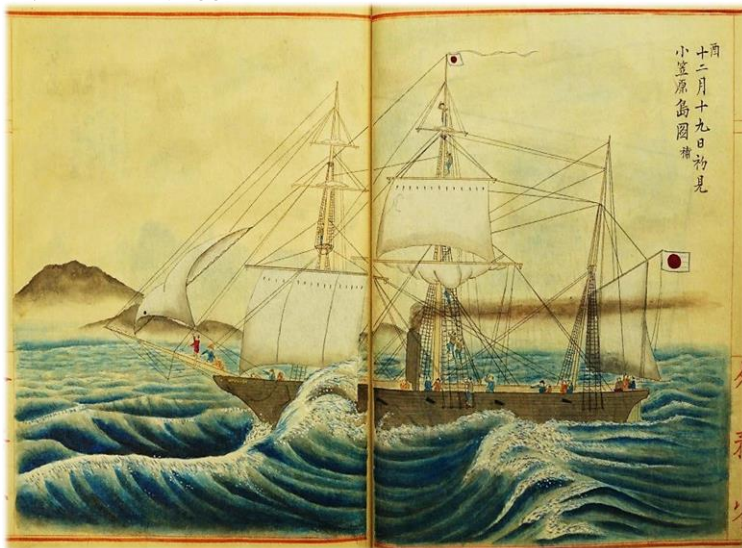


【参考】咸臨丸船中困難の絵図

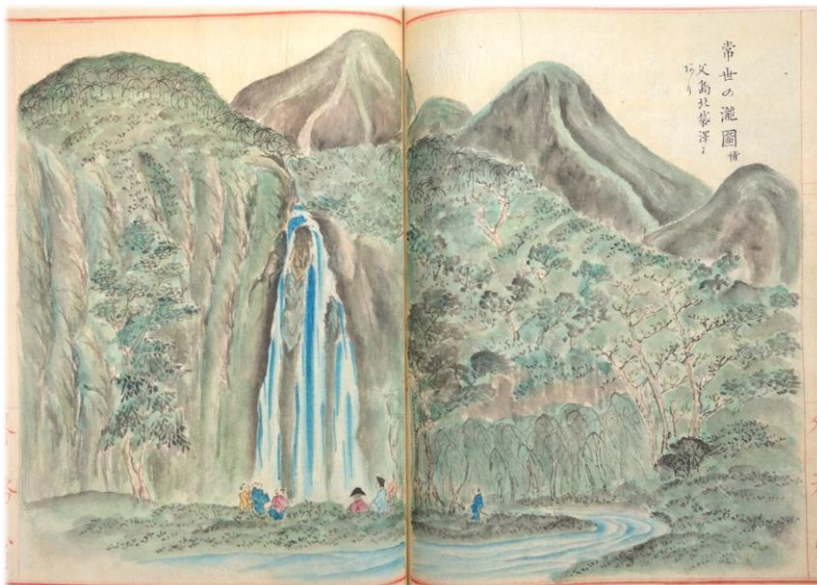
咸臨丸一行の内地帰着後、1862年7月7日（文久2年6月11日）、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ、ロシア各国に小笠原島の再開拓を通知しました。

ところが、翌年5月13日（3年3月26日）に突然入植者に計画の中断と撤退を命令しました。入植者が滞在したのは約9か月でした。幕府がこの判断を下した主な理由には①幕府の財政難、②入植者が現地で米の栽培に失敗したこと、③生麦事件のさらなる報復を恐れたこと、④小笠原島開拓に尽力していた安藤信正が坂下門外の変で倒れたこと、⑤開拓使節の団長であった水野が失脚したことがあげられます。

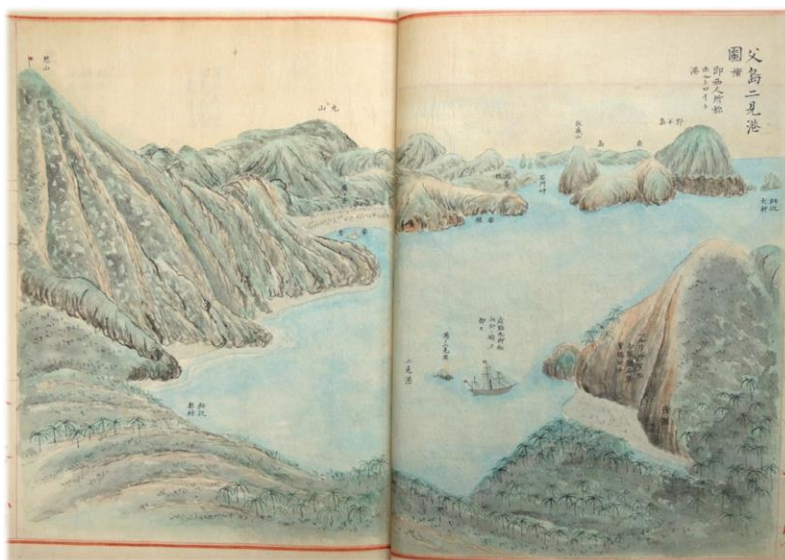
なお、江戸幕府が倒れた後の経緯は次のとおりです。1873（明治6）年5月にイギリス公使パークスが小笠原島は日本の所属かと質問し、上野景範外務卿代理は日本の所属であり、いずれ管理する方針と答えました。1874年1月、外務卿寺島宗則は小笠原島への官吏派遣を上申しました。1875年10月になり、ようやく田辺太一（外務省）・小花作助（内務省）らの官吏が派遣され調査が始まりました。この結果、1876年10月に寺島外務卿は諸外国に小笠原諸規則を送付し、日本が管理することを通告しました。



【参考】「12月19日初見小笠原島図」



【参考】常世の滝の絵図



【参考】父島二見港の絵図

4-3 小笠原島に居住する人々

展示史料には、外国人女性が縄跳びをしている様子が描かれています。また、その他の場面では日本人と思われる人がいるなど、雑居状態であったことがわかります。

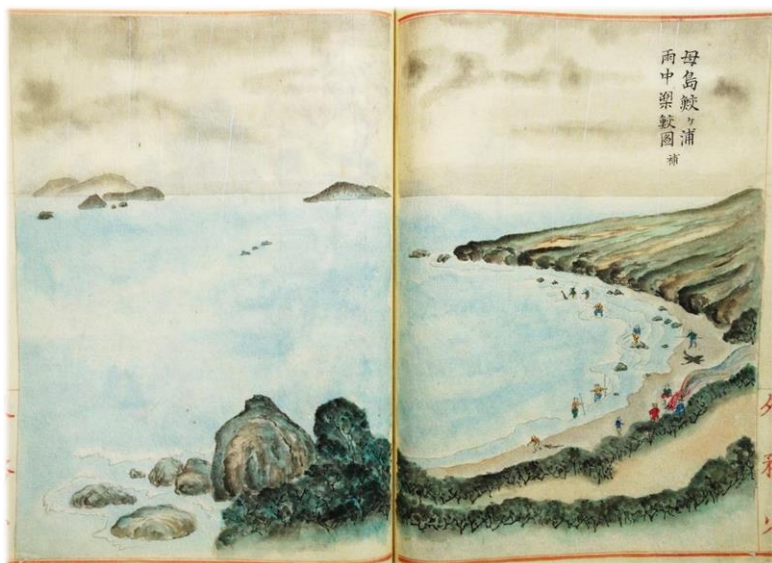
このほか小笠原島関係の史料には、地図、島の地形、植物、住居、島民の生活の様子などが詳細に描かれています。



展示史料 4-3

1862年3月10日（文久2年2月10日）

母島沖村に居住している外国人の様子



【参考】「母島鯨ヶ浦雨中樂鯨図」



【参考】「母島南手之山上喫午飯図」

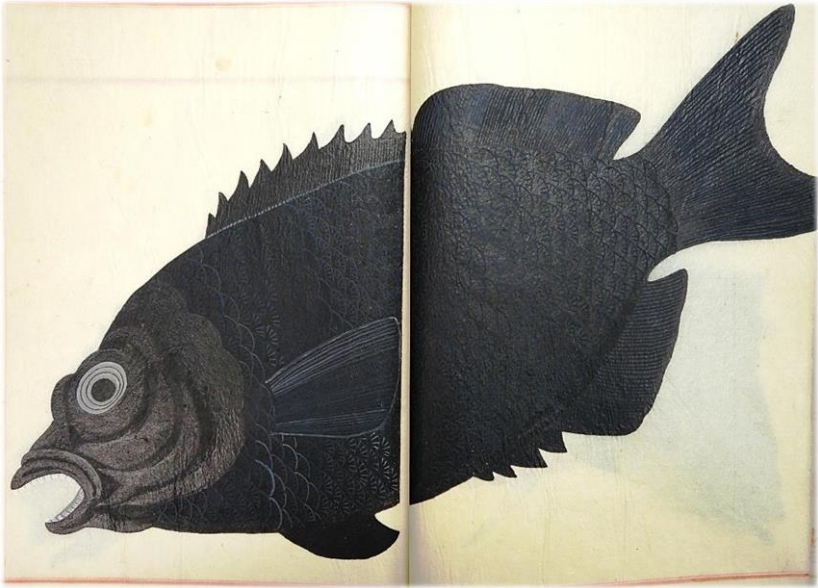
4-4 小笠原島に生息する魚介類

展示史料に、「魚類甚多し内地の魚と異なる」と書かれているように、小笠原島周辺には独自の生態系が発達し、豊富な魚介類が生息していることがうかがえます。



展示史料 4-4

小笠原島周辺に生息する魚介類の絵図



おわりに

本展示では、幕末期における人々の往来（“うおーく”）に注目しました。

日本はペリー来航と日米和親条約によって開国へと歩み出し、安政の五か国条約によって、それまでの日本では考えられなかった外交官の駐在や外国人の往来が生まれました。一部の日本人のなかには外国人を排撃しようとする心理も生まれました。外交史料館のある麻布周辺の歴史をみると、攘夷運動の舞台となった外国公館の存在と、幕末期の様々な混乱に揺れ動く人々の姿が見えてきます。

こうしたなか、西洋文明への憧憬から海外への渡航を積極的に進め、活動の範囲を飛躍的に拡大していく日本人の姿もありました。パリ万博への参加や小笠原島の巡検など、それまで関心が薄かった国内外の地域へ日本人がまなざしを向けたのは、幕末の西洋との出会いがあったからでした。

本展示では、膨大な「通信全覧」（320冊）「続通信全覧」（1784冊）のなかからほんの一部分を紹介したに過ぎませんが、これらの文書によって、世界と向き合った幕末日本の姿に思いを馳せていただければ幸いです。そして、もし幕末への関心を高めていただけたなら、次は本展示で紹介した幕末の外国公館の跡地などを実際に訪ねて、“うおーく”してみてはいかがでしょうか。

展示史料の出典一覧

第1章

- 1-1 『ペリー提督日本遠征記』第1巻
- 1-2 続通信全覧類輯之部外航門 861「長州藩吉田寅次郎外一名米国船に密乗海外航露頭未遂一件」
- 1-3 日米修好通商条約（複製）
- 1-4 日米修好通商条約批准書交換証書（原本）

第2章

- 2-1 続通信全覧類輯之部礼儀門 18「荷蘭領事官初登城一件 二」
- 2-2 続通信全覧類輯之部館舎 734「善福寺米国仮公使館一件 一」
- 2-3 通信全覧 215「李国対話 一 （万延元年）」
- 2-4 続通信全覧類輯之部暴行門 1133「東禅寺英仮公使館兇徒襲撃一件 一」
- 2-5 続通信全覧類輯之部官舎門 756「長応寺蘭国仮公使館一件 一」
- 2-6 続通信全覧類輯之部官舎門 755「高輪接遇所英国仮公使館一件 三」

トピック

- 1 通信全覧 179「英国対話 六 （万延元年）」
- 2 続通信全覧類輯之部規則門 405「江戸在留外国人遊歩規程一件」

第3章

- 3-1 続通信全覧類輯之部修好門 309「徳川民部大輔政行一件 附仏国博覧会 一」
- 3-2 続通信全覧類輯之部修好門 328「徳川民部大輔政行一件 附録 四」
- 3-3 続通信全覧編年之部 408「仏国往復書翰 六 （慶応三年）」
- 3-4 続通信全覧類輯之部修好門 313「徳川民部大輔政行一件附録 附仏国博覧会 五」
- 3-5 続通信全覧類輯之部修好門 347「徳川民部大輔政行一件附録 二十三」
- 3-6 続通信全覧類輯之部修好門 344「徳川民部大輔政行一件附録 二十」
- 3-7 続通信全覧類輯之部機関門 869「横須賀製鉄所一件 一」
- 3-8 続通信全覧類輯之部機関門 876「横須賀製鉄所一件 八」

第4章

- 4-1 続通信全覧類輯之部船艦門 920「陸奥小友浦船小笠原島二漂着外人移住ノ概略具状一件」
- 4-2 続通信全覧類輯之部雑門 1299「小笠原島真景図 父島之部」
- 4-3 続通信全覧類輯之部雑門 1300「小笠原島真景図 母島之部」
- 4-4 続通信全覧類輯之部雑門 1301「小笠原島鱗介図」

幕末日本の関係略年表

年(西暦)	月	日	年(和暦)	月	日	出来事
1853	8	11	嘉永6	7	7	ペリーが浦賀に来航
1853	7	14	嘉永6	6	9	浦賀でフィルモア大統領の国書を受け取る
1854	3	31	嘉永7	3	3	日米和親条約調印
1854	4	25	安政元	3	27	吉田松陰の密航計画失敗(下田踏海)
1856	9	3	安政3	8	5	ハリス駐日米国総領事が下田の玉泉寺に仮公使館を開設
1858	4	23	安政5	3	10	オランダ使節クルチウスが真福寺に入る
1858	7	29	安政5	6	19	日米修好通商条約・貿易章程に調印 ※安政の五カ国条約
1858	8	12	安政5	7	4	ロシア使節ブチャーチンが真福寺に入る
1858	8	16	安政5	7	8	外国奉行設置
1858	8	18	安政5	7	10	日蘭修好通商条約・貿易章程に調印
1858	8	19	安政5	7	11	日英修好通商条約・貿易章程に調印
1858	9	26	安政5	8	20	フランス使節グローが真福寺に入る
1858	10	9	安政5	9	3	日仏修好通商条約・貿易章程に調印
1859	4	16	安政6	3	14	芝赤羽根講武所付属調練所跡を赤羽根接遇所に指定
1859	6	26	安政6	5	26	オールコック駐日英国総領事の着任、東禅寺に仮公使館を設置
1859	7	7	安政6	6	8	ハリス駐日公使米国公使が善福寺に入る
1860	5	23	万延元	4	3	日米修好通商条約の批准書交換
1860	8	3	万延元	6	17	日葡手交通商条約・貿易章程に調印
1860	9	8	万延元	7	23	プロイセン使節オイレンブルク一行が赤羽根接遇所に入所
1860	9	11	万延元	7	26	オールコック駐日英国公使が外国人として初めて富士山に登頂
1861	1	15	万延元	12	5	ヒュースケン遭難
1861	1	24	万延元	12	14	日普修好通商条約・貿易章程に調印
1861	7	5	文久元	5	28	水戸浪士有賀半弥らによる東禅寺を襲撃
1862	1	21	文久元	12	22	竹内保徳ら遣欧使節出発(翌年12月9日帰朝)
1862	4	8	文久2	3	10	日葡修好通商条約批准書交換(於善福寺)
1862	6	26	文久2	5	29	松本藩士の伊藤軍兵衛が東禅寺を襲撃(第2次東禅寺事件)
1862	6	6	文久2	5	9	ロンドン覚書調印(江戸・大坂の開市、兵庫・新潟の開港5年間延期、貿易制限撤廃)
1862	7	7	文久2	6	11	幕府は英米仏蘭露各国に対し小笠原島再開拓を通告
1862	9	14	文久2	8	21	生麦事件

1861	12	17	文久2	11	16	幕府は英米両国に対し小笠原島開拓再興を通告
1862	12	17	文久2	12	19	水野忠徳一行が小笠原島に到着
1862	4	13	文久2	3	15	水野忠徳一行が小笠原島での巡検を終え帰路につく
1863	6	25	文久3	5	10	下関砲撃事件
1863	8	15	文久3	7	2	薩英戦争
1864	2	6	文久3	12	29	日瑞修好通商条約・貿易章程に調印
1864	9	5	元治元	8	5	英仏米蘭の連合艦隊による下関砲撃
1865	6	9	慶応元	5	16	新任の駐日公使パークスの来日
1866	4	11	慶応2	3	7	徳川昭武一行パリに到着
1866	4	28	慶応2	3	24	フランス皇帝ナポレオン3世に謁見
1866	5	1	慶応2	3	27	パリ万国博覧会開会(～11月3日)
1866	8	1	慶応2	6	21	日白修好通商条約及び航海条約に調印
1866	8	25	慶応2	7	16	日伊修好通商条約・貿易定則に調印
1867	1	12	慶応2	12	7	日丁通商航海条約に調印
1867	2	15	慶応3	1	11	徳川昭武がパリ万博のため出発
1867	9	10	慶応3	8	13	日白修好通商条約及び航海条約批准書交換
1867	10	1	慶応3	9	4	日丁修好通商条約批准書交換
1867	11	9	慶応3	10	14	徳川慶喜が大政奉還を申出る(翌日朝廷受諾)
1868	1	3	慶応3	12	9	王政復古の大号令
1868	1	10	慶応3	12	16	徳川慶喜が政権返上後も外交は幕府が管轄する旨を各国公使に通告
1868	1	27	慶応4	1	3	鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争始まる
1868	2	8	慶応4	1	15	新政府が外交に当る旨の国書を各国公使に手交
1868	9	23	慶応4	8	8	徳川亀之助(家達)が徳川家は外交に関与しない旨を各国公使に通告
1869	8	15	明治2	7	8	外国官を廃止して、外務省を設置 (初代外務卿沢宣嘉)
1869	7		明治2	5(6)		宮本小一が小笠原開拓を建議(太政官の沙汰なし)
1874	1		明治7	-		寺島宗則外務卿が小笠原島への官吏派遣を上申
1875	10		明治8	-		外務省員の田辺太一らが小笠原島の調査を実施
1876	10		明治9	-		寺島宗則外務卿が諸外国に対し小笠原島の自国管理を通告

【主要参考文献】

- ・ M.C.ペリー監修・F.L.ホークス編『ペリー提督日本遠征記』第1巻（1856年）
- ・ ベルリ提督著・土屋喬雄・玉城肇訳『日本遠征記（二）』（岩波文庫、1948年）
- ・ ベルリ提督著・土屋喬雄・玉城肇訳『日本遠征記（四）』（岩波文庫、1955年）
- ・ オールコック『大君の都』中巻（岩波文庫、1962年）
- ・ 田辺太一著・坂田精一訳・校訂『幕末外交談』第1～2巻（平凡社、1966年）
- ・ 大山梓『旧条約下に於ける開市開港の研究』（鳳書房、1967年）
- ・ 鹿島守之助『日本外交史1 幕末外交』（鹿島研究所出版会、1970年）
- ・ 鹿島守之助『日本外交史3 近隣諸国及び領土問題』（鹿島研究所出版会、1970年）
- ・ 田中正弘著・通信全覽編集委員会編集『通信全覽惣目録・解説』（雄松堂出版、1989年）
- ・ 安岡昭男『日本近代史（増補新版）』（芸林書房、1989年）
- ・ 鳴岩宗三『幕末日本とフランス外交』（創元社、1997年）
- ・ 田中正弘『近代日本と幕末外交文書編纂の研究』（思文閣、1998年）
- ・ 宮永孝『プリンス昭武の欧州紀行』（山川出版社、2000年）
- ・ 犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新』（日本放送出版協会、2001年）
- ・ 佐野真由子『オールコックの江戸』（中公新書、2003年）
- ・ 港区立港郷土資料館編刊『江戸の外国公使館』（2005年）
- ・ 萩原延壽『遠い崖』4～7、14巻（朝日文庫、2007～2008年）
- ・ ロバート・エルドリッチ『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』（南方新社、2008年）
- ・ 犬塚孝明『独立を守った“現実外交”』（NHK出版、2012年）
- ・ 簗原俊洋・奈良岡聰智編『ハンドブック近代日本外交史』（ミネルヴァ書房、2016年）
- ・ 西川武臣『ペリー来航』（中公新書、2016年）

外務省外交史料館特別展示「幕末へのいざない」展示史料解説

平成 28 年 10 月 11 日 初版

※本展示解説冊子の一部を引用する場合には、必ず出典を明示してください。また、引用が一項目全体など長文にわたる場合には、事前に外交史料館にご相談ください。

外務省外交史料館

〒106-0041

東京都港区麻布台 1 丁目 5 番 3 号

Tel 03-3585-4511

